

第3回特色ある県立高校づくり懇談会

議事録

高校教育課

【事務局：今井高校改革推進役】

それでは大変お待たせいたしました。ただいまから第3回特色ある県立高校作り懇談会を開会いたします。会議の進行を務めます長野県教育委員会高校教育課高校改革推進役の今井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは開会にあたり長野県教育委員会の内堀教育長から挨拶を申し上げます。

【内堀教育長】

皆さんこんにちは。第3回の特色ある県立高校づくり懇談会を開催しましたところ、お忙しい中お集まりいただき、またはオンラインでご参加をいただきまして誠にありがとうございます。

前回、松本工業高校を会場に開催させていただきましたが、本日は東信地区の普通科高校の上田高校を会場に開催をさせていただきました。学校現場の雰囲気を知っていただくこともありますし、また高校生との懇談もしたいという意図もあります。前は多様な進路に進んでいく子どもたちが多い高校の高校生との懇談でしたが、本日はほぼ全員が4年制大学に進学していくような学校の生徒たちと懇談をしていただいたところであります。

今回のテーマは、前回までご議論いただきました、「これまでの高校とこれからの高校」、それから、「高校の入口出口」といったことを踏まえまして、大きく分けて二つあります。

一つは諏訪地区の7区ですけど、諏訪地区の状況なども踏まえながら、県の境にある県境校について、その魅力化をどう図っていくかというようなこと。もう一つは資料をいろいろ用意させていただいておりますが、それらを参考にさせていただいたり、あるいは、本日の高校生との懇談を参考にいただきながら、長野県の高校の特色や魅力をどう作っていくかということを全般的にご議論いただければありがたいと思っています。

これまでも皆さんには幅広く、大所高所から様々なご意見を頂戴してまいりましたが、本日も活発な意見交換がなされることをお願い申し上げまして、冒頭の挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】

次に本日の出欠の状況を報告いたします。まず、ご欠席者でございますが、信州大学の荒井准教授、KOA株式会社の向山会長、松本市教育委員会の伊佐治教育長、坂城高校の小木曾先生は本日欠席ということになります。株式会社ナイアンティック・クリエイティブディレクターの野

村さんは、オンラインでの参加ということになります。また本日、オブザーバーとして阿部知事もオンラインにて出席をしております。どうぞよろしくお願いいたします。

会議事項に入る前に、本日会場としてお貸しいただきました上田高校の生徒による学校紹介をお願いしたいと思います。それでは上田高校の花岡くん、よろしくお願いいたします。

【上田高校生徒】

=上田高校の学校紹介=

【事務局：今井高校改革推進役】

それでは意見交換に入る前に、本懇談会の公開について説明をいたします。本懇談会につきましては、会議を公開で行いますとともに、会議資料及び議事録、また撮影した写真等について県のホームページ等へ掲載するとともに、希望する構成員の皆様へ写真を提供いたしますのでご承知おきをください。また懇談会の模様をライブで配信するとともに、議事録を作成するため録音をいたします。あわせてご承知おきいただきますようお願いいたします。

次に資料の確認をさせていただきます。お配りいたしました資料は、次第、第3回目配布資料、構成員の皆様から提出いただいた資料1点となります。ご確認をお願いいたします。

それでは会議事項に入ります。進行は座長の信州大学村松教授にお願いいたします。

【村松座長】

はい、それではよろしくお願いいたします。まずスタートにあたりまして、先ほど非常に素晴らしい上田高校の紹介・発表をいただきありがとうございます。Liptonが大人気というレア情報など、非常に充実した高校生活の様子が本当によくわかりました。また、高校生の声を聴く会でも、探究を社会や連携して非常に頑張っているという姿とか、探究をやりたくて上田高校に進学してきたという声も聞きました。

その一方で、テーマ決めるのは難しいというちょっと消極的な声もあったのですが、実は自分で将来やりたいことがあって、その進学も含めて今取り組んでいるという話を聞いて、未来は明るいと感じさせられました。今日のお話の中でも、そういったお話等も含め進めていければと思います。

それでは本日の議事に入らせていただきます。本日のテーマは、先ほど内堀教育長からお話ありましたとおり、特色化・魅力化についてです。議事に入るにあたりまして、事務局から資料の説明の方をお願いできればと思います。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

「第3回目配布資料」に基づき説明

【村松座長】

はい、ありがとうございます。ただいまの資料説明につきまして何かご質問等ありましたらお願いできればと思いますがいかがでしょうか。よろしいでしょうか。それでは早速に意見交換に入らせていただきます。先ほど説明もありましたが、ここまでの2回の議論を踏まえましてより深められればと思います。本日の論点としては特色化魅力化ということでお示しいただいた2点「魅力ある選択肢を拡大させるための高校が必要なのか」、それから「県高校は中山間地の存続にはどのような特色が必要か」に絞って議論を進めていければと思います。また、今回と次回も含めまして、更に議論を展開できればと思っております。

とりわけ今いただきました資料3ページに、特色化のイメージを例示いただいていますけども、県全体と見てきたときにどのような選択肢があれば良いのかというところも論点として進めていければと思います。

本日、この2点について進めていくに当たりまして、5ページの資料一覧でこれだけの資料用意いただいています。今回、議論を少し集中させていただきますと、県境校、全国募集、地域連携、この辺に今回少しフォーカスをして進めていければと思っております。

まずは県境校から議論を始めたいと思うんですけども、議論が深まるように、事務局から補足のご説明いただいてもよろしいでしょうか。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

第3回目配布資料9ページの「県境に所在する高校について」を説明

【村松座長】

はい、説明ありがとうございます。ただいまのご説明につきまして何かご質問等ございますか。どうぞ。

【野村構成員】

はい。今の説明で資料9枚目のところ、その県外への流出状況っていうのが合計403名ということですけど、県外からの流入はどれくらいいるのですか。

【村松座長】

もし事務局で補足できれば。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

少しお時間をいただいて確認をしたいと思っております。

【村松座長】

ではまた後ほどよろしくお願いいたします。その他いかがでしょうか。私から1点ですが、先ほどのご説明で都市部とは異なる再編基準とあったのですが、具体的にはどのようなものですかね。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

高校の望ましい学校規模というものを示しまして、その定めた数字を2年連続して下回った場合には、今後の再編対象とするという基準を設けております。再編基準につきましては、教育委員会の発表資料の中で公表していますけれども、必要ならば次回に資料提供をさせていただければと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございます。再編基準がポイントだと、話を聞いていて思いますので、ぜひ資料のご提供をよろしくお願いいたします。

【野村構成員】

もう一つだけいいですか。

【村松座長】

どうぞ。

【野村構成員】

長野県の状況については詳しく書いていただいているんですけど、全国や他県との比較はありますか。例えば、実は全国どこでもこんな感じなのか、それとも長野県が突出して何か変わっているかとか、そういう比較はありますか。

【村松座長】

事務局いかがでしょうか。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

ただ今、手持ちの資料としてはございません。申し訳ございません。流入につきましてはお答えできますので、推進役から回答します。

【事務局：今井高校改革推進役】

県外から長野県の高校へどれだけ流入しているかという数字ですが、令和5年度では、公立72名、私立271名、合計343名長野県内に流入をしております。その前の令和4年度は、公立68名、私立に239名、合計307名ということで、大体300名強の流入がございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。野村さんよろしいでしょうか。

【野村構成員】

ありがとうございます。5年平均と比べるとどうかわかりませんが、それなりに流入と流出のバランスが取れているのかもしれないなと思っていました。この中に流出理由、なぜ県外に行くのかはいろいろ書かれているのですが、なぜ長野県に来るのかという理由も調べるといいかもしれないなと思います。ありがとうございます。

【村松座長】

魅力の1つとしても必要じゃないかというご意見いただきました。またご検討いただければと思います。その後どうでしょうか。それでは意見交換の時間に入らせていただきます。各委員の皆さんに忌憚のないご意見いただければと思います。はいどうぞお願いします。

【安原構成員】

よろしくお願いします。先ほど高校生の皆さんから聞かせていただいた貴重な意見についてもちょっと言いたいんですが、とりあえず県境についてですね、実は私、その資料を持っています。こちらは、公式に出されてるようですが、再編整備計画三次というもので、これをちょっとダウンロードしてみました。それを見ますと、再編が、ものすごい勢いで、今、計画されている状況がある。我々が今日みたいに高校生の真剣な眼差しを見たりしても感じるのですが、本当に真剣に考えなきゃいけない状況に来ている。例えば若者人口も2037年には6割ぐらいになる。だから再編はやむを得ないという動きがあるとは思いますが、そこが一番慎重に議論すべきではないかと実は思います。

本当に再編は必要なのかということですが、その基準がですね、都市部存立普通校なら520人以下、中山間地存立校なら120人以下となされています。その基準がそもそも何をベースに作られたものなのか、相当な議論の上だとは思いますが、当然ながら特に県境の地元高校の廃校というのは、近隣の住民にとっては死活問題だと思ってます。人口の一層の流出は避けられないと思います。

そもそも少子化というのは、教育費がかさむからというのが大きな一つの要因にあると思いますが、そこで高校が、地元の高校がなくなることによって、より教育費がかさむ、そうすると、より当然少子化が進むという悪循環ですね、それが見られるのではないかと私は危惧しています。むしろ今の時代、このICTの活用とか、そういうのこそ、この県境に活かして、当然対面の授業の方がいいんですが、例えばその分校という措置ですね、それは本資料では、地域キャンパスという名前を出されていますが、長野県は今2校あると思いますが、校長先生はいない状況で、

他校と合同の中でやる部分があるでしょうが、そういう措置をしてでも、残すべき高校もあるんじゃないかと思います。

例えば新聞の記事で、信濃毎日新聞さんの記事「白馬高校を存続へ全国募集」という記事を、これいつだったか忘れましたが、拝見しました。また白馬高校がなくなれば白馬から公立高校がなくなる、地元は必死だと。例えばですが、国際観光課というのがあるんだから、その高校そのものを観光地にしてしまって、その高校で土産物を買ってみたりとか、あるいは農業高校と提携して農業高校が作った特産品を売れば、インバウンドの人たちは、むしろ高校をその観光地の一つ選んでいくんじゃないか、そのように魅力化というのがいろいろ考えられます。再編再編の前に、本当に再編すべきなのかどうか、それは今の時代、これから少子化の時代で本当に適切なのかというのも考えていければいいんじゃないかなと思います。ついでながら、その魅力化に関してちょっと2点ほどよろしいですか。

【座長】

はいお願いします。

【安原構成員】

先ほどの生徒さんとの話し合いで、この上田高校は非常に活発な生徒のプログラムを作って、いろいろ研究・探究が進んでいるというのを感じました。だからある程度の進学校と言ってしまうとあれですが、自分たちの生徒の自治に任せて、それを特色とすればいいと、あんまり大人が関与するのではなく、いわゆる昔言われた自治ですね、それを今一度その価値を見直せるんじゃないかなと思います。

それと、デュアルシステムというのも今回の議題に上がってますが、働きながらそれを単位に取得して認定する。だから学校に通いながら、しかもアルバイトをしながらいろいろ勉強できる。そういうシステムについても生徒さんに聞けばみんな良い反応を示してくれました、「すごい、やってみたい」と。ただ「忙しい」と。高校生はあまりにも忙しくて部活もあったりいろんな探究もあったりして時間がないということを言ってました。その辺の兼ね合いがすごく難しいとも思いますし、デュアルシステム、デュアルシステムと言いますが、日本人はすぐドイツ発祥の、ドイツのシステムになろうとするけど、やはり日本独自のもう少し緩い形でのそういう単位互換性システムがあるんじゃないかなというのを感じました。以上です。

【座長】

はい、ありがとうございます。まず再編等についての再度検討が必要じゃないかってご意見ありがとうございました。この会議自体は、再編そのものを具体的に議論するっていう会議ではございませんので、個別的なちょっと今の地区がどうだっというところまではちょっと深入りはできないんですけども、ただ、再編そのものを時代の流れに合わせてもうちょっと検討した方がいいっていうのは、今後の課題としていければと思っております。

それから今いただきました魅力化ですね、ここ（３）の２の例に挙げていただきましたけれども、この話はとりわけ、後段の、やはりデュアルシステムは日本独自のシステムっていうのかね、その海外のもので海外でもいいよっていうだけじゃなくて、やはり日本独自でもっと言えば長野県独自でそういうものを踏まえたとやっぱり県としてどういようなことを考えていけばいいのかっていうことが非常に大事ななということで今ご示唆いただいたかと思います。ありがとうございました。

関連したところでも結構です。その他いかがでしょうか。それでは岩本さんよろしく申し上げます。

【岩本構成員】

はい、よろしく申し上げます。中身に入るといよりも、今日の論点となっているところの資料の３ページですかね、長野県の高校の現状と特色化・魅力化に関する論点というところが今日の中心的な話になってくるのかなと思うのですけれども、そこの紫が掛かっているところ、長野県が推進したい県立高校での学びというのが左にあって、第３回、第４回で皆さんに議論いただきたいというところで、ここに関して私が少しだけ違和感あったところがあるので、少し考え方を含めて意見させていただけたらと思います。

一点目はですね、長野県が推進した県立高校での学び、それまでの議論を踏まえというところで、どの学科でも生徒が希望する進路を叶えられていっているようになってですね、本当にそうなのかなというのがまだ腑に落ちていなくてですね、今までの話でどの学科でもどんな社会でも活躍できる資質能力を身に付けられるようにしましょうという、高校を卒業していく中でですね、高校というものであれば、長野県立高校であればどこで学んでも、この資質能力はしっかりと資質能力というか、力を育てようと、これはいわゆる高校における必修の科目だとかありますし、そういったところですね、だからその部分は分かるのですけれども、生徒が希望する進路をどの学科からでも叶えられるようにしていこうとした時にですね、この県立高校に対する様々な声のところにありますけれども、例えば、東京大学や医学部医学科にもですね、全ての学科から対応するのでしょうか。海外の大学に進学したいっていう子のニーズにも全ての学科で対応するとかっていうことになるのでしょうか、ということですね、そういうことだったっけみたいなようになってですね、どんなところでも活躍できる力の話とですね、本当に進路のところをどうしていくのかっていうのを、その学科単位で全部どんな進路でもやってくださいみたいなことをやるとですね、逆に学科の特色が出なくなりますし、教員もですね、ある意味これによって多忙になっていくっていうので、これは多分、表現の仕方の話なのだとは思いますが、これ結構、大きな考え方の全ての学科で全ての進路に対応しなさいっていうことまで言うのかということになるかもしれないので、ちょっとどうなのかなという気がしました、というのが表現上のところですよ。

もう一つが、右側、第３回、第４回で皆さんに議論いただきたいというところの、県境校や中山間地域の存続にはどんな特色化が必要かと言ったときに、私の認識では特色化と魅力化という

のはそもそも発想というか、ちょっとだけ観点が違うと思っ
ていまして、特色化と言ったときには、うちは例えばピンク
ですと。ピンクという色を特色として色を出します。私達
は紫です。こっちは黄色です。というそれぞれが色をは
っきりと出して行って、出していくというのがどちらか
かという特色化で、ピンクの色を出したときにはその
ピンクに興味があるという子たちはピンクに集ま
ってくる。黄色といったら黄色に集まるというよ
うな形で学校の色を出してそれを特に学びたい
というような形だとかそれに合うという子たちが
集まっていくこと。この特色化と言ったときには、
家から通える高校がたくさんあるエリアで、一つ
一つの学校が特色を出して行って、例えば、市内
とかここにはもう60色とか十何色もあります
というエリア全体で見たら多様性に対応できる
という状態になるっていうのがこれは都市部の
戦略というか、都市型であればそうやって1
個1個、スクールポリシーを作っては
っきり特色を出しましょうみたいな形でや
っていくとそれは専門性もそうです。そう
やって特色化すると学校の中はより共通性
が高まる、黄色なら黄色をやりたい子
たちがなるべく集まってくるから黄色の
やり方でできるので、例えば、海外に
行きたい子たちが集まる、海外大学へ
行きたい子が行けるような高校です、
みたいな色を付けた時にはそういう
ことに興味がある子たちが集まれば
海外に向かっていく学習とかをかなり
やっていける、となるので、これが
特色化の私のイメージですと。

そうした時に、これ県境とかですね、
例えば中山間地域の高校で色を出す、
特色を出すと逆に生徒が来なくなる
っていうことが十分に考えられると。
なぜなら、地元の子たちのニーズは
多様であると。近隣の子たちのニーズ
は多様で、その多様性に黄色やピンク
やいろいろな色をもった子たちが
いるのだけれど、うちの高校は水色
ですっていう、例えばその小さい
学校がですね、特色を出したりした
時には水色以外のことに興味ある
子たちはより一層外に出ていく
っていうことが起きていくリスク
があるということで、特色を出すと
外からは分かりやすいから来やす
いのですが地元からはより選ばれ
にくくなると。要は家から通える
高校の数が少ないような所は実
は特色化ではなくて、それで魅力
化と言っている訳ですけど、一つ
の学校に多様な生徒たちが地元
からとかですね、外にも行か
ずに来てもらおうと思うと、一つ
の学校の中でその多様性に対応
する教育環境を持たなきゃいけ
ない。大学進学まで対応する
必要があるかもしれないという
形で、小さいのだけれども、その
中に多様性をもたせるという
多様なことに対応するっていう
ことが割と必要になってくる
ので、それをどうやるのかとい
う手法はその後の議論だと思
うのですけれど、何かこの県境
校とか中山間地域の高校の存
続にどんな特色化がって言
われると、いやちょっとその
特色化っていうのは長野県
全体ではもっとグローバルに
海外進学できる場所が必要
だとかですね、デジタルの何
とかだっていうのを、エリア
ごとにそういうニーズが本
当にあるのだったら、そう
いう特色ある学科をエリア
ごとにちゃんと作りましょ
うとか、長野県に一つだけ
海外進学できる場所を作
るのだったら全県から
そういうことに興味ある
その色を持った子たちが
集まれるように寮か何か
を設置して一応対応する
とかっていう、特色化
戦略を考えると、さ
ういう子たちが県内の
いろいろなところから
ちゃんと来られる環
境はあるのかって
いうことを考
えないといけ
ないですし、もう一つは
特色化戦略とい
うかですね、特色化
を考えると、特色
が合わなかつた
ときにどうする
のかっていう
ミスマッチは
起きると。

前回の話の時もありましたが、中学生が選ぶときに必ずしもベストマッチを選べるとは限らないし、1年やって2年やってちょっと違うかもしれないと思うかもしれない。特色の中には、従来型の旧来型の超詰め込みで何か国公立目指しますっていう、まあ、それも一つの特色だから1校ぐらいあってもいいけど、探究的な学校とか何とかあってもいいのですけれど、自分はここがいいと思って選んだらやっぱり合わなかったっていうようなことが特色化を進めていくとその可能性が高くなるので、そういう時にはどう変えられるのかという、生徒の学科だとか学校の行き来の柔軟性の仕組みをより担保しないといけないとか、学校間連携とかをしやすくして卒業できるように通信制とかも含めて他校の単位も取れるような内規とか教務規定にしておくとかっていう、特色化戦略をやるときに学校がそれぞれにある程度担保しなきゃいけない仕組みもあるので、それは考えなきゃいけないのですけれど、それと県境校や中山間地域校の存続に必要な戦略はちょっと違うというふうに認識してますので、なのでそれが特色化かって言われるとですね、ちょっとどうなのかな、と。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

まず、1点目にいただいたどの学科でも生徒が、例えばこれまでの流れからいくと、職業科高校のところからでも大学進学ができるとか、割ともっと大きな桁の話で、今言われた東大とか海外の話っていうのは個別の意見としては出てきてるんだけど、必ずしもそこに全部フォーカスするっていうのはちょっとやや限定し過ぎかなという気はいたしました。

そんな理解で、事務局よろしいですかね。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

岩本様、ありがとうございました。

今お言葉にもありました通り、ちょっと表記表現の問題でございまして、ただいま座長が整理してくださった通り、前回も出ておりました職業系の高校からも大学進学を叶えられるようにとか、そういった逆に普通高校からの就職というのものもあるかと思えますけど、そういった意味合いでございまして、そのように扱っていただければと思います。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

もう一つ大きな話に、「特色化」ということが戦略としてどうなのだろうというご指摘、合わせてミスマッチが生じるという、これはどちらかと運用した後の話かと思うんですけども、ここは多分非常に難しいところだと思うんですけどね、多分岩本さんが言われたように、絞り込むとそれに合う子以外はいなくなってしまうというのはおっしゃる通りだと思いますし、一方、魅力化で今言われたような、そのリソースができるかどうかは別にして、そういう県境校とかでも一定、多様な学びができるような、それ自体が魅力化でもあり、一種、特色としても出せるんじゃない

ないかっていう、そういうやり方の選択肢もあるか、もちろん地域性ですごい核になるようなものがあって、他県でいうと島根で何とかとか、っていうような、そういうのもいい、それで勝負できるんだっていうのがあれば別ですけども、そうでないと確かに岩本さんが言われるように、なかなか絞りきれないとなってくると、むしろそういう県境校だからこそ、でも、だからこそというか、県境校でもこれだけのいろんな多様な学びとかいろんなことができるんだっていうようなことがやれるっていうようなのが戦略としてはいいのかなというの今お話を聞いていて思いました。

もちろん、今おっしゃったように、それをやるためにはかなり柔軟な仕組みも必要かと思えますし、本日今日私の方で出した資料の中でも何ページ目ですかね、いただいたもので、軽井沢高校さんとかの単位制の例ですね、長野東高校さんと単位制で運用している例がございました。実際にこれでやりだすと、それだけ先生方が大変で、人手がかかるので、実際うまく回るのかっていうことはあるんですけども、こういうような事が試みられて選択的なものになってくると今言われたような多様ななんていうのも一つ可能なのかなというのをお聞きしてて思いました。

ありがとうございました。

その他どうでしょうか。関係したところも結構ですし、その他の論点ですね、どうぞ堀井様、お願いいたします。

【堀井構成員】

はい、ありがとうございます。よろしく申し上げます。

私も全く岩本さんと同じ観点があって、「特色化・魅力化の前に」っていう言葉を用意して持ってきたらお話いただいたんで、「その上に」というお話しです。

もう1つは、その県境から流出する流入するっていうお話なんですけど、現実的に今の高校1年生の人口がおそらく109万人で、2022年に生まれた子たちが77万人で、結局15年後の高校1年生って7割しかいないんですよ。その状況の中で、全国がそうですと、おそらく都市部の方が減少率が低いとなってきたときに、「全国で生徒の奪い合いをするんですか」と、ちょっと疑問を感じてしましまして。

であるならば、その県境のお子さんたちは、さっきの岩本さんのお話に通ずるんですけども、県のもうちょっと真ん中に住んでいる交通インフラがある程度できているところの生徒さんよりも選択肢が少ないのは事実ですよ。それで、その東西南北360度、高校を見つけるルートがあるならばいいけれど、こっち側にしかないっていう状況を見て、反対側の県境の方に行ってしまったことに対して、というよりは、むしろ隣接県と連携をされた方がよりその一人ひとりの生徒さんのためになるんじゃないのかなっていうのが、まずその隣接県との関係性という点で、私の意見です。

その上で、長野県として魅力・特色っていうことを、1校1校の魅力・特色というよりは、長野県の特徴としてはとって、私もいくつかの県を見たり、あるいは世界の教育活動を見て思うのは、すごく極論だと思っていただいて構いません、私の私見でございますので。今のティーン

エイジャーの方々にとってグローバル、今後のグローバルな世の中じゃないです、もう今グローバルなんです。その世の中において英語とコンピュータサイエンス・テクノロジーに触れられない、そういう環境がないのは人権侵害だと思ってるぐらいです。英語だけじゃないです、「(外国語)」だと思っんですけど。私インターナショナルスクールにおりまして、ハーフの子だったりとか、海外の子たちと一緒に学びを進めておりますけれども、もう英語と日本語とか、英語と母国語というレベルじゃないんです、もうグローバルでは。3カ国語目、4カ国語目が普通です。3カ国語目、例えば東南アジアの生徒さんたちにしてみれば、母国語と英語と中国語、コミュニケーションレベルであれば、日常会話程度では何とかなる。語学はそのぐらいのベースからのスタートになってるんですよ。日本の場合はどうしても島国というものもありますので、その日本語で、しかも高度経済成長で日本がどんどん先進国になったので、そこまでやらなくても大丈夫だったっていうのは事実としてやはり先輩たちの実績の上に私達は生活させていただいてるわけですけども、やはり今はもうそういうレベルではなく、そして3カ国語目を、2カ国語持つてる子は3カ国語目を勉強するのは当たり前で、その他の言語に関心を持ってるんですね。だから英語を勉強しなければグローバルで勝てないというレベルではないというのを海外回ってみても、すごく肌感覚として持っています。

なので、私としては、例えば長野県はものすごく魅力があるので、自然が豊かで、日本のなんというんですか、日本の100百名山のうちのほとんどがこの長野にあたりとかするじゃないですか。そういうものに海外からもものすごく注目を受けているってことを考え、そこで旅行とかいろんところで来てくださる方がいて、そういう人たちと一緒にこの地球を作っていくってことを考えたときに、例えばですけど、長野県のレベルの違う英語環境、それからコンピューターとテクノロジーに関して、もうコンピュータサイエンス、アメリカなんてコンピュータサイエンスの授業はマスト、というかも絶対必修科目みたいなもんなので、そういったような感じでやるとですね、中高生というか高校生だけではなく、産業界からもそのグローバルに非常に魅力のある県になるというふうに思ってるんですね。

なので、そうするとですね。奪い合いじゃないでしょって言った私が言うのも変ですが、山梨県も、長野県の学校に行けば、英語とコンピュータサイエンスはもうインフラですと、教育インフラですとなったときに大きく変わってくると私は思っております。

なので、もちろんその産業系の教育活動みたいなものもすごく大事ですし、それから普通教育、今日、私、上田高校の生徒さんとお話をして、すごくこのポテンシャルは素晴らしいと思ったんです。いろんなお話をする中で、どんどんいろんな声があがってきて、4人の生徒さんが全て違う観点を持っていて、全て違う気づきを持っていて、そして最後にですね、教育長に向かって、「こうしてください」、「ああしてください」っていう、そういう要望まで出てくる。というぐらいのポテンシャルがあるとしたら、英語教育と、それからコンピュータサイエンス・テクノロジーに加えて、生徒が学校をつくる。主体者である、主人公である生徒が学校を作るのは長野ですよというような、そういうことをやっていきます。そうすると、その生徒さんの個々の個性、これがやりたい、あれがやりたいっていう、いかに地元の方々とか、あるいは長野の我々が

何とか尽力をすることによって、必然的に魅力になる、特色になるんじゃないのかなとちょっと情熱を語ってみました。ありがとうございます。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。まずは流入流出についてですね、隣接県との連携、そして、個々の学校というよりは県全体の魅力、特色、こういうものを押し出して、新しいその英語、コンピューターサイエンスだけでなく、生徒が主体でというような学校作りのようなお話をいただきました。

今のお話、この後のテーマである全国募集とか地域連携、こういうものにも今もうお話も入ってきてますので、そこら辺も含めながらいければと思います。

私の方で出させていただいた資料ですね。こちら経産省の、市町村と附属学校と一緒に登壇したときに高校関係のお話をいただいたので、ここでということで紹介させていただいたんですけども。

例えばその16ページですね。教育イノベーション小委員会というところでも、やっぱり少子化、小規模校でのオンラインの活用ですとか、地域拠点としての学校インフラ。もしかしたらこの県境校、こういったところが地域の拠点となっていくし、今お話のように多様な学びとか、そういったことってというのは、やっぱりもう全国的に大きな課題だなというのがあります。

17ページもですね。コース料理からビュッフェ型ということで、本当に生徒さんがいろいろ学べるような。当然そういうものにはいろいろコストがかかりますので、18ページなんかでも提案されているのが、例えばってということで学校ごとだけではなくて、自治体とかそういった地域なんかでいろんなものを共有して、教育資産をより有効に活用していったらどうかと、そういうものですね。それから後半の方では、ふるさと納税を利用して企業なんかともっと連携してっていう、地域と連携して、こういった魅力化特色化っていうのをどんどん進めていこうというそんなお話も行ったところでもあります。これが長野県の中でどこまでっていうのはあるかと思うんですけども、今いただいたような話も含めまして、積極的に活用できる部分でいろいろあるんじゃないかなということでちょっと私の方からも出させていただきました。

さあ皆様いかがでしょうか。どうぞ鳥谷越様お願いします。

【鳥谷越構成員】

蟻ヶ崎高校鳥谷越です。貴重なご意見をたくさん聞いて本当に勉強になるなと思って今ここにいさせていただきます。

資料の9ページの、その県境にある高校の充足率ですけども、これを見ますとやっぱり私の今在籍しております中信地区というところだと、蘇南高校の充足率が一番低いということが現状であります。そして蘇南高校の現状をお聞きいたしますと、やはり教員がここに転勤をしてくれるという、ある程度の40代以降の先生方というのはなかなかここまで生活の拠点が、例えば松本市等々にある方も大変通いづらい。ですので高校等々にはもう初任の先生しか行く先生がいな

い。平均年齢がもう30歳代だということでも聞いております。先ほど座長様からもありましたとおり、やはり長野県の教員ですので異動があります。こういった県境校にも異動がしやすいようにするためにはどうしたらいいか。そして先ほどの堀井さんからもありました通り、例えば外国語、そしてコンピュータサイエンス等々に関わる、そういった教育をこういう例えば県境校でもできる、そういう魅力化ができていくには、人が必要であるということも大事だと思います。

私達のその県立の教員だけではなく、例えば家族がそちらに移住して先生方が教える、またはそのご家族も何かそこで勤められる、あるいはこの県境域のところで産業が活発化されて、そこにいらっしゃる英語の能力がおありな方、あるいはコンピュータサイエンス等々にも有能な方々が特別講師でこういう学校にも教えに来られる。なんかそういうことを考えると、長野県のこの高校の再編だけの問題ではなくて、やはり地域の産業をどうしていくかとか、地域の自治体とのこの連携の中で高校がどう存在していくかっていう議論もすごく必要だなと今思っております。

私どもはいよいよ高校の教員の人事がこれから始まる場所でもありますので、本当にこういうところに先生方にぜひ行っていただけないかということが非常にやはり厳しい状態があるということも、ちょっと現状としてあるということもちょっとお伝えをしたかったなと思って発言させていただきました。

【村松座長】

はい。ありがとうございます。こういった魅力化、そういった実相、学校を作るためのそもそも支える人の話。ということで今、人事異動、それから地域との連携等で非常に貴重なご示唆いただきました。ありがとうございます。関係したところでも結構です。その他いかがでしょうか。

【野村構成員】

いいですか。

【村松座長】

はい、じゃあどうぞ。

【野村構成員】

野村です。皆さんのいろんな意見をお聞きして、どれもそのとおりだなと思って聞いておりました。

ちょっと一つ何でしょう、かなり面白くない話をしたいなと思っていて。今、特色化とか、その特徴を出すとかそういった話をメインにされてると思うんですが、これから人口がもうどんどん減っていく、子どももどんどん減っていく中で、特色もいいんですが、やっぱり基礎の学力があつてのいろんなことだと思うんですね。

先ほど堀井さんかどなたかが、言語が二つ、英語だけじゃなくてそれ以外のはもう、国際的にももうそんなの当たり前だっていうふうになってきてるっていうお話もある中で、僕は今シンガポールに住んでるんですけども、やっぱり周りは英語が喋れて当たり前で、その他に自分の母国語があって、さらにもう1カ国語喋れるのが結構普通なんですね。子供もみんなその環境で育つので、言語二つ三つは本当に何も珍しくないような場所であります。

この国もやっぱり教育はかなり教育熱心で、当然いろんなプログラムもあるんですけども、まずその前提として、基礎学力の、響きはよくないんですけども詰め込み教育をものすごく力を入れてやっています。日本の、よく、何でしょう、あんまりいい意味でその詰め込み教育型教育ってとらえられないんですけども、でも僕は結構いいことだと思っていて、やっぱり基礎学力をつけた上で、その学ぶ力、そのそれぞれの知識も大事なんですけども、どうやって学ばかっていう学ぶ力を、詰め込み教育の中で手に入れることができると思っていて、先ほどの山間部でいろんなその特徴を出すと逆に人いなくなるかもしれないじゃないかっていう指摘もあったように、やっぱりまずどこもその長野県全体として、その基礎学力をとにかく上げるっていうことを考えるのも大事なんじゃないか。そのそれぞれの特徴を出す前にまず全体の学力がとても高い県である。そこからスタートしないと、何か、何でしょう、その基礎もないのに、あれもこれもってやってもあんまりうまくいかないんじゃないかなというふうにちょっと感じました。

【村松座長】

はいありがとうございました。基礎と今の、鶏が先か卵が先かみたいところはございますけれども、非常に今貴重なご指摘いただきました。いろいろ多様な学び方をするためにやっぱりその前提となる基礎が非常に重要だというのは、確かにおっしゃるとおりかと思えます。もちろん県の教育委員会の方でも様々そういったことをですね、それこそ小学校段階、中学校段階、高校と重ねてきての現在かと思えますけれど、そういった部分を大事にしながら、またさらにこういった多様な学びをどう両立させていくのかっていうのが、これからの非常に重要な、かつなかなか難しい課題かなというふうには感じているところであります。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。どうぞ、じゃあ安原さんはい。

【安原構成員】

学力の話になりましたので、私はそれで呼ばれているような気もしますので、ちょっと塾の立場から。野村さんがおっしゃったように、学ぶのには詰め込みも大事で、何よりも子供たちは学ぶことが好きなんですね。私も教えて、子供たちはまず学びたい、そしてわかりたいという気持ちで、すごく持っているのがわかります。

ちょっと怖いのは、今そんな探究もそうなんですけど、そういう、実際的に発信するということ、いろいろやっているんだけど、そのベースにある読書をしたり、いわゆる学問をする、そういうところをおざなりにすると、あるいは大人になってから困ることもあるんじゃないかなという気もします。

知人で塾をやっている人に聞きますと、その人はかなり精鋭的な人でして、とにかく「学力を上げないといけない」と、「長野県の学力が下がってる」というようなことを彼は言います。データははっきりしたものは無いのですが、彼が言うには、「昔、1970年ぐらいが東大に100人ぐらいが長野県から受かった。今は数十人しかいない」と。そういう観点もどうかとは思いますが、やはり子供たちは学びたいし、できればハイレベルなところで学びたいという欲求はあると思います。岩本さんも指摘された、あまり特色、特色ではなくてというところで、どの学校もやはり進学したい子をちゃんと救える。そのためにそろそろ、塾とか予備校とか、いわゆる民間です。その連携も考えてもいい頃じゃないかなと思います。当然、学校の先生からしてみれば、何で免許も取らずに教えて、しかも志望校合格率をあんなに誇っていいところ取りをして。子どもたちの人格形成とかは学校に任せてと、と言いたいところはあると思います。

ですが、塾もいろいろあります。私は塾産業という言葉に反対でして、教えることを産業にしちゃいけないと思って小さくやってるつもりですが、それでもいろんな、いわゆるスキルの高い講師というのはたくさんいます。そういう人たちと、例えばですね、学校の先生との違いは、我々はいくつかの教科を跨いで教えることが多いです。だから、教科間の繋がり、例えば理科と数学の繋がりとか、相似という数学の概念を理科のテコで使えるぞとか、そういういろんな視点で教えることができます。すぐに連携は難しいと思いますが、一回話し合いの場とか、学校側の要請、そして塾側の要望、そういうのを聞きながら、すり合わせていくことが必要じゃないかなと思います。

実際、学校の先生も、自分の子どもは塾に出す。それが現状です。結局、民間に教育の一部を任せるのだったら、もうちょっとやり方があるんじゃないかと思ってます。塾の使い方ですね。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。今の基礎学力が大事だという話では、指標の取り方みたいなので結構課題になってくるかとは思いますが。例えば、学力テストとかありますけども、いつの間にか順位争いみたいな形になっちゃうとちょっと本末転倒だと思いますけども。一方で、今言われたような民間のそういったこういった皆さんと学校との連携、例えばそういったものが教員研修なのか授業等も含めてなのかと、いろんな観点から考えられるかとは思いますが、一つの提案としては、非常に大事なところかなというのは感じました。ありがとうございました。

【安原構成員】

補足します。中山間地ですね、烏谷越先生が言われたように先生の数が少ないというところを補ったり、課外授業とか、自習室とか。塾講師などを利用する上で、そういう使い方もあると思います。

【村松座長】

はい、そうですね。多様な連携方法があるんじゃないかというご提案いただきました。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。では、石坂様、よろしくお願いします。

【石坂構成員】

長野県PTA連合会の石坂と申します、まずそもそも聞きたいんですけど、この山梨県の学校って、たくさん行ってらっしゃるのは、市立の学校だから公立だと思んですけど、住所が長野県のまま通えるのですか。それをまずお聞きしたいんですけど。

【村松座長】

事務局の方でお願いできますか。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

こちらの学校については通えます。

【石坂構成員】

普通はできないんですか。

【事務局：宮澤高校再編推進室長】

県立高校の間ではですね、連携協定などを結ばない限りにおいては出入りができないんですけど、こちらは県の縛りを受けないといいますか、市立高校でございまして、しかも長野県から中央東線で県境を越えた比較的至近な距離にある学校として、本県からも大勢の中学生が進学するという状況でございます。

【石坂構成員】

であれば、その保護者の立場とすれば、近いし、進学率を見たら単純に見てちょっと魅力あるなって思えば、隣の県でも行ってもいいんじゃないっていうふうになるとは思うんですよ。結局、わかりやすいのは、進学率とあとは部活が強いかどうか。やっぱり子どもにとっては、部活ってすごい重要で、なんか県外から長野に流入する私学に行ってる子っていうのはおそらく部活のために来てる子がほとんどだと思うんですよね。多分佐久長聖とかそういう感じだと思んですけど。なので、そういう見やすいものっていうのは、とても子どもにとっても親にとってもわかりやすいと思うんですよ。流出するのはある程度はしょうがないっていう気持ちもあるんですよね。保護者としては。

あとは、さっき高校生に話を聞いたときに、地元ともっと何か連携していろいろやりたかったけど、そういう機会がないっていう話があって、前回の会議のときに「長野に住んでいる高校生がちゃんと長野で就職するように教育してるのか」みたいな話が出たときに、私はオンラインで

聞いてたんですけど、いやそうじゃないだろうと思ったんですよ。その教育じゃなくって、人との繋がりとかがあってこそ、自分が長野に残ろうと思うっていうのがあると思うので。やはり地元との繋がりを大事にするようなものがあれば、地元の高校に行こうかなっていう選択肢も出てくるかなと。ちょっと綺麗事かもしれないですけど、そういうふうなことは思います。

あとは、須坂創成高校が商業、工業、農業、全部あって、私がちょっと見ていた限り、うち子が工業高校なんで、創成高校も調べたんですけど、倍率が結構上がってるんですよ。なんか人気があって、見学行ったときもすごい人数いて、すごいなと思ったんですけど、そういう一つの学校でいろんな選択肢がある。ピンクも黄色も青もあるっていう学校があれば、選びやすいのかなっていうふうには、保護者としては思います。

あと、この上田高校の子たちが特進クラスがないっていう話をしてたんですよ。それはちょっとびっくりして、そうなんだと思って。私が元々京都出身で、私の時代は京都の高校は自分では選べなかったんです。通学区が決まってる、ここに住んでいるなら、この高校に行きなさいっていうのが京都の仕組みで、ただ成績がいい子は特進クラスを選べました。後、商業とか、工業とかそういうのは選べたんですけど、普通科に関しては自分では選べなかったっていうのがあったので、特進クラスがないのがちょっとびっくりしちゃって。何かそういう受験に特化したクラスとかっていうのを作るのも、ちょっと見やすい魅力かなっていうふうには思いました。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。保護者の観点から具体的なご提案いただきました。進学率もですね、部活が強いも、最近の先生方の働き方改革なんかもあるので、そこを推し進めるのはちょっとっていうところはございますけれども。今のように魅力が中学生、それから保護者の皆さんにストレートに伝わるような、そういうものでなければいけないという、そういう点は非常に大事な点かなというふうに思います。

また、須坂創成高校さんの例ですね。本日の資料でもデュアルシステムの紹介の方をいただいておりますし、こういったようなところも一つあります。また今のような地域との連携みたいなところも先ほどお話ありました。民間との連携もありましたけども、ここも非常に大事な点かなというので、お聞きして感じたところでございます。

いかがでしょうか。関連したところ、それ以外でも結構でございます。

【赤荻構成員】

こんにちは、赤荻です。

ちょっと学歴ない人としての意見なので、こんな考え方もあるんだ、ぐらいで聞いていただきたいんですけど、私は中卒で、勉強もあまりしてこなかったんですけど、やっぱり、一生懸命勉強される、されている方とか、すごいリスペクトしているし、私もたまたまこうなっただけで、猛勉強して東大に入りたかったっていう道も実際はあったと思うんですよ。ただ、いろんな偶然

が重なって、こんな人生を歩んでいるんですけど、もちろん、学力を長野県の皆さん自体で底上げしていきたいというのはすごくいいな、勉強嫌いの私からも感じたんですけど、ただこういった人間も少しいるんだよっていうことをちょっと忘れないでいただけたら嬉しいなと思いました。

先ほど、人との繋がり、やっぱり大事だし、私もそんなご縁があって、長野県さんの県立高校作りのお手伝いをさせていただいて、やっぱり私も今校長とかができているのって、今までの人との繋がりだったり出会いがあって、こうなっているわけで、将来何かをするために、人との繋がりだったりとか、あとは今までどんな何か支え合ってくれたりとか、応援してくれる仲間がいたかってすごく重要なことだと思っていて、人との関わり方も高校生のときにしっかり身につけておいた方がいいんじゃないかなと思っています。

どうやって身につけるかという、いろんな経験をする、いろんな地域の方だったり、いろんな世界の人を知って、こんな人もいるんだっていう、自分の価値観をすごく広めていくことがやっぱり重要な、柔軟になっていくのが重要な、仲間だったり人のやりたいこととかを許容できる人になっていくっていうのがすごい重要なって思ったんですけど、今日、高校生の生徒の方の意見をお聞きする機会があって、ちょっと話変わっちゃうんですけど、夏休みがすごい少ないっていうのを聞きして、今年は20日間ぐらいだったんですかね。3週間、すごく少なくて、ほとんど班活と課題、あとは少しの帰省で本当に何か自由な時間がなく、終わってしまったっていうのを聞きました。なんていうんですかね、遊んだ方がいいとかじゃないんですけど、何か新しい出会いがある機会、新しい出会いを求めるとか、新しい出会いがある機会が夏休みの間とかにちょっとあってもいいのかなって思ったので、ぜひ夏休み3日でも延ばしてもらって、地域の夏祭りにしっかり遊びに行ける、課題のことと班活のことを忘れてしっかり夏祭りを楽しめるぐらいのちょっと余裕をあげた方が、いいのかなというふうに思いました。すいません、ちょっとまとまってないんですけど、夏休みを楽しませてあげたいです。

【村松座長】

ありがとうございました。ちょうど今、赤荻さんと私も同じ班に同じグループにいて高校生さんと色々な話を聞き、非常に今の人の繋がりっていうのでいうと、いろんな地域に出たりとかして、そういう中で今お話あったように余裕、あの夏休みの話も出ましたが多分、高校生活にもちょっと余白が多分あるといいのかな、そういうような余白ができることによって、またはいろんなもっと経験豊かな体験とか、そういう学びですね、そういう触れ合いそういうものが生まれるのかな、なんて聞いていて思いました。

また、これの夏休みについて校長先生の裁量である程度、動かせるお話かとは思いますが、またこれもですね、しっかりしてあげればと思います。ありがとうございました。

その他いかがでしょうか。はい山下様。

【山下構成員】

山下フルーツ農園の山下と申します。よろしくお願いいたします。

県境に所在する高校のところに地元の高校もありまして、やっぱり充足率が低いんだなっていうのを目にしてちょっと考えるところもあったんですけども、確かにほとんどの地域の子供たち、長野市の高校に今は行っている人が多いのかなっていうふうに感じていますが、やはりあの事情があって、地元の高校を選んでいる子たちも多くいると思います。その中で、やっぱり多様な本当に学びが必要っていうことは感じる部分があるのと、あと、今日生徒さんの話聞いている中で、授業を受ける先生を選べたらいいというみたいな話が出てきたんですけども、今、結構、先生に勉強させられている感がちょっとあるっていう、良いも悪いもあって、自分で選ぶことによってもっと主体的に授業を考えることが、受けることができるんじゃないかなんていうふうにおっしゃっていました。県境の高校、確かに先生の問題とかそういったこと大きいと思うんですけども、これだけ今インターネットで授業を受けるっていうことも可能になってきている中で、もっともっと、普通科の県境高校でもいろんな先生の授業が受けられますよっていうようなことがあれば、大学進学を目指す子どもであっても、地元で高校に通えるっていうと将来の選択肢がより広がっていくんじゃないかなんていうふうに感じます。

あと、私も石坂さんと同じ班だったんですけども、その地元ともっと一緒にいろいろやりたかったっていう生徒さんがいらっちゃって、小学校中学校のときの方が地域との連携の授業が多くあったと。確かに普通科の高校で、こういった大学進学となると勉強がすごく多忙しくてなかなかその地域とのついでというのは難しいのかもしれないですけども、よりこういう県境の地に根ざした高校の方が地域との連携っていうのはやりやすいのかなんていうふうを感じる部分があります。そこが魅力化というところにも繋がっていくんじゃないかなんていうふうに感じますので、そういったところで、その特色化魅力化みたいな話もありましたけど、ちょっと地元ならではのことが学べる場所という形で残していただけるといいかなんていうふうに思いました。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

地元ならではのいうね、その特色魅力化のお話をいただきました。ちょうど今のお話が先ほどの須坂創成高校さんの話もありますけども学科とかの話もちょっと関連してくるのかなんて思います。今日の全体の配布資料の6ページでしょうかね、新たな学科の設置等のお話も出てきております。これが、県境校とかで新しくドーンってのはなかなか難しいのかもしれないですけども、これから考えたときにその時代の学びとか、こういうのを扱う時に、この学科っていうような観点からも、今後、地域連携とも絡め議論できればと思いますけども、これも含めていかがでしょうか。どうぞ岩本様。

【岩本構成員】

たまたま昨日出会った方の中に、長野県の県境に住まわれている方がいて、子どもが高校になる頃には、やっぱり外に出そうかというようなことを言われており、そのときはもう自分も出るかなぐらいなことを言われていてですね、今日県境の高校をどうしていくのかっていうところの話だったので、すごくリアリティを感じたというところだったんですけども、まずその県境だとか中山間地域の高校をどう特色化なり魅力化をしていくのかというところで、私の前提の考え方でまず申します。

基礎学力とか進学ってやっぱり大事だと思ってます。ただ基礎学力は大事なんだけどその基礎学力とかを身につけるやり方が詰め込み一斉授業なのかどうかっていう手法はまた別の話だと思っていてですね。手法はいろいろあると。詰め込みというところでも一斉授業型を想起してしまうんですけども、上田高校のようにある程度の選抜をくぐって、学力層が似ている近い同質性の高い集団で4年制大学へのこういうところを目指したいという、そういう集団に対しては一斉授業型っていうのは効率が良かったっていうことはやっぱりあると思います。

一方、小規模高校とか中山間地域とか、おそらく県境の学校になったときには学力層がものすごい多様というか幅広くなってます。そういう学校は学力の幅が広くて進路も多様です。そのときに一斉授業で基礎学力をつけるということは、実際難しい。なぜなら全然違うところをつまづいてたりだとかっていうところなので。基礎学力は大事ですが、ただそういった県境校みたいな小規模校のときには個別最適な学びをそれぞれやっていかないと、一斉授業で機能するのは、こういう都市部にあって、ある程度偏差値の序列が機能しているっていうところの学校、もしくはその習熟度別でもクラス分けられる特別進学クラスとか言って、できるところの話はそれでいいんですけど、そうじゃない学校なんだということを前提に置いて議論しないといけなかなと思いますので、そういう中山間地域だとか高校の魅力化をやっていく上でのポイントは、もう先ほどからも再三出てますけども、やっぱり一つは徹底的な地域資源の活用、地域協働です。

要は小規模校なので教員の数少ないから生徒の数も少ないしそこで使える時間やお金っていうのはものすごい少ないのに多様性に対応しなきゃいけない。多様性に対応するのはものすごい大変なわけです。リソースが必要だと、時間も含めて。そういうときに教員をさらに何人も何人もそこにつけるのかっていったときにもそういうことができる状況ではない。もし、知事が金やそういうところでも10人でも20人でもつけるよと言ったら話は別ですけど、おそらくそこまでの余力はさすがに長野県といえどもないと思いますので、そうしたときにはやっぱり地域の人だとか、物だとか、地元市町村のお金も含めて使っていくっていうぐらいやっていくっていうのが今全国的に見てですね進んでるところの動き方です。例えば放課後や土曜日、今日も上田高校の生徒で「土曜日の授業とかあれも本当やめてほしい」とか言ってましたけど土曜日まで出てきて先生もやってるという放課後とか、土曜日とか学びたい人たちが来て学習するんだってだったので、その地域側とか地元市町村側が放課後や土日の学習の支援の環境を作ってるっていうところがなんかもう出てきてますし、それこそ地域の人材が何か英語でもデジタルでもプログラミングでも教えるとかっていうのも別にそれで土曜日やったっていいわけですし、そこに教員免許なんか別に土日だったら必要ないですし、ということをや地域の人・もの・金を徹底的に使い倒すっ

ていうのがもう大原則というかですね、それをやろうとしたときには、やっぱり教員だけではなかなか難しい。なのでコーディネートする人材ってのが必要で、これが片手間だとなかなかできなくてちゃんと専従というかちゃんとしたコーディネーターを置いて、どう地域のリソースをふんだんに活用するのかという1人置いて3人分ぐらいのリソースを取ってくるじゃないですけどね。例えばですけど。ぐらいの形でやるっていうのが一つコーディネート人材の配置ってのは地域の高校において欠かせない。

二つ目の戦略要素はこれも皆さんから出てましたけど、徹底的にオンラインとかの活用っていうところですね。通信制の教育もそうですし遠隔授業みたいなやり方もありますが、オンラインなんかを活用しながらどう個別最適な学びを提供していくのか。例えば語学、何カ国語とかって話ありましたけども英語はどこでもやっていますが例えば中国語とか韓国語とかあっても別にそんなこと教えられる先生なんかいないけどもオンラインでそういう先生が教えてもいいかもしれないとか、ということもオンラインを使った形での学習であればですので、小規模高校になると、例えば物理はもう配置ができなくなりますとか情報の専任の専門性の高い教員が配置できないとか、地学がないとかですね、そういう専門がないとかっていうことなんかもある中で、そこにさらに情報の専門性の高い教員で小さいところにおけるかっていったらおけない状況だと思いますのでそれだったら、オンライン、遠隔なり通信を使っていくみたいな形でそれを本当に学びたい子がいるのであればしっかりと大学受験にも対応できるレベルのものをしっかりと個別にこの学校に1人、あっちの遠くの高校にも1人そこにもう1人とかですね、いたときにその5人に対しては、それぞれちょっとやろうかとかっていうことが各学校の中だけではできないですけども、オンラインとかを使いながらですねやっていくとできるようになるというのが二つ目です。

あと三つ目は越境とか交流の活用というので、やっぱりずっと地元で生まれ育ってですねなかなか人間関係は同質性が高くなっていくっていうのがこの県境とか中山間地域の特徴ですし、何かもっと刺激が欲しくて外に出ていく子たちがどんどん出てくるというところに対してそれで全国から多様な全国募集じゃないですけどもそういったところから多様な価値観とか文化を持った子たちが一緒に来てですね、すごい切磋琢磨するっていうこともそうですし、学校間でオンラインで繋いで他の学校だとかの生徒とも交流できるとかですね。あと今始まっているのは1年間の留学みたいな形で他の学校に留学をして、学べるとかですね、そういう海外だけじゃなくて国内でもできるようになってますしっていうところで、そういう異文化だとか異なる人や学びにですね小さいところからでももう抱え込んで「もうここから出るな」という形だけじゃなくて、いいよと「外の学びもどんどん取ってきていいよ」というような形で越境や交流をちゃんとできるような開かれた学校にしていくっていうのがおそらく三つ目の戦略なのかなと思います。

【村松座長】

はいありがとうございました。

あの連携での中心に今大きくは4点ほどご提案いただきました。1点目が地域資源を徹底的にということで地域との連携を深めてやっていくっていうところですね。

先日ですねちょうど私が大分県の関係のSTEAM教育の取り組みってのを拝見したんですけども、ここ大分県さんのうまいなと思ったのが、教育関係だけではなくて産業系とかも皆さん入って、〇〇×STEAMみたいな形でテーマを立ててですね、例えば農業×STEAMとか、地域の何とか×STEAMっていう形でそうするとあの企業だけじゃなくてその地域も含んでいるなとこの今の予算とかも含めて、そういう高校とか小中とかも含めて連携してやれるっていうので、もしかしたら枠組みが本当に今の教育のこの中だけっていうよりももう一段大きな、これはこの後阿部知事、ぜひお願いしたいとお話いただいたらいいのかもしれないですけども、教育施策の話だけじゃなくて、産業施策とかそういうのまで含めてちょっと大きなデザインとかの中でやると、もしかしたら今の話ってのがいいのかなと思います。

だからコーディネーターを置くことによって非常に円滑にいろんなことが進む。やはり要の部分のこういった人ですね、これも一つの重要な議題かと思いました。

三つ目がオンラインをとにかく徹底して活用しようということ、それから最後いただきました越境交流のような外とどんどん交流させていく、リアルに行くというのもあるし、今言ったオンラインの交流等もあるし、いろんな形ですけども、例えば他者と関わることで視野を広げていくというのは、それが魅力化にも繋がるんじゃないかというそんなお話でございました。特に最後のあたりのところは国際的な学びなど、こういうところにも繋がってくるお話かと思います。どうでしょうか、関係したところで、他にもご意見等をいただければと思いますが。新しい学科の話にこだわらず、今の国際的な話、それから地域連携コーディネーター、オンライン交流など。

どうぞ安原様。

【安原構成員】

どうしても提案したいのですが、今までの私の話とは全然違いますが、自然学習と農業を必須にしてはどうでしょうか？どの学校、高校においても、自然学習というのは、信州の自然、そして農業は信州の農業、それはこれからの混迷する世の中で、生きる力になると思います。本当にひょっとしたら我々は山のキノコを食べて生きていかなきゃいけないかもしれない。ところが現代人は、我々大人も含めてキノコも当然わからない。今の子どもたちは虫が駄目なんですね。虫が出ただけで、恐怖におののく、男の子も女の子も。それを阿部知事に懇談会で話したらびっくりして、「それ、いかなな」と言っていました。本当に自然と農業だけでも特色になるとは思っています。一提案です。

【村松座長】

ありがとうございます。自然と農業について学ぶというのはどうかというご提案でございました。ありがとうございました。今、虫関係も色々注目を集めているところでございますけども、はい、他にはどうでしょうか？関連したところで。

【野村構成員】

いいですかね。すいません。

【村松座長】

はい、どうぞ野村さん。

【野村構成員】

先ほど岩本さんの話で、山間地、県境の高校については、そもそもその学力にギャップがあつて、みんなで一斉教育というのはそもそも向いてないという話があつたんですけども、おっしゃる通りだと思っていて、さっき、詰め込み教育をした方がいいというふうに言ったんですけども、本意は、どちらかというとも基礎教育の大事さというものを強調したくて、そういうふうに話しました。

オンラインの資源の活用という話もいろいろ出ていたんですけども、今は本当にYouTubeを見れば大体のことは何でもあつて、それこそ教えるのがものすごく上手い人たちが、学ぶ気持ちさえあれば何でも学べる状況にあるなというふうに思っています。けれども、そもそも学び方もわからないという子たちがたくさんいると思うんです。そういうオンライン資源の活用という意味では、学力もあつて学べる子は、勝手に学べばいいとも思うんです。勝手にというのも、その学び方をやはり学校で教えてあげて、何も先生が前で黒板で授業しなくたって、先生よりすごくうまく教えられる人がたくさんいるので、先生はどちらかというとも困ったところを助けたりとか、そこまでの学力もない子に対して、どうやってその学び方を教えるかっていう、そういったところにもっと注力できれば、各自の学ぶ力を高めるのはYouTubeではできないと思うんですよ。それが実際にその場にいる先生の、必ず必要な力ですし、逆に各自の学ぶ力を伸ばすことができれば、その先はその子自身がいろいろ自分の力でオンラインなどを使って学んで、そこでつまづいたところをまたその先生が助けるというような、今までの一斉教育とはまた違う、そういう教育の形はあるのではないかなと思いました。

【村松座長】

ありがとうございました。基礎学力を高める、必ずしも一斉ということよりも今のように学ぶ力を伸ばす、確かにいろいろなやり方がありますし、詰め込み教育も言われますけれど、おそらく一番問題なのは、実際に子供たちの中に詰め込まれていなくて、みんな欠落していつてしまうということ自体が、多分大きな問題なのかなと。そのためにも、今、野村様からご提案いただいたような、本当に学ぶ力を伸ばす、そのベースの部分を作ってあげるとするのは非常に重要なお話かなというのを感じるところでございます。残すところ、あと30分少しとなつてまいりました。その他いかがでしょうか。今、いろんな基礎学力の話、それから学科とか国際的な学び、そういうのも含めまして議論が広がっているところでございますけれども、どんな観点からでも結構でございます。いかがでしょうか。

【阿部知事】

ちょっとだけいいですか。

【村松座長】

はいどうぞ。

【阿部知事】

皆さんのご発言がずっと続いていたので、発言せずずっと聞いていましたけれど、ほとんど皆さんから出ている意見の方向性でそうだよなと思って伺っていました。具体化がどうするかというところが、多分、問題な気がするのですが、皆さんのご意見を踏まえながら、私としてもいくつか申し上げたいと思います。

まず村松先生の資料の中にも書かれていますけれど、オンライン、デジタル化が進む中では、学校のあり方というもの、そもそもA校B校それぞれどう特色を持たせますかということの発想だけではもういけないのではないかというふうに思っています。複数校、場所は違うけれども一つの学びの場にしてしまうと、小規模校とか小規模校ではないとかという話がありますけれども、オンラインで繋いでしまえば世界とだって繋がれる状況になっているので、もっとその発想自体を20世紀型の学校のあり方の発想から根本的に変えていかないと、20年後30年後にもつような学校的设计にはならないのではないかという、本質的な問題意識があります。それをするためには、多分学校の先生方の役割が変わらなければいけないと思います。先ほど、野村さんもおっしゃっていました、どなたかもおっしゃっていたと思いますけれど、画一性の教育の重要性がだんだん下がってきて、一人ひとりの子供の自主的、主体性とか、能力個性に合った教育をしようというときに、みんなが同じ時刻に県立高校の先生、例えば国語の先生が各学校で同じような授業をやっているというのは、完全に20世紀型じゃないかなと。ある意味、オンラインでわかりやすい先生の授業を、前回も出ていた話だと思いますけど、配信して、他の先生方は個別に、進んでいる子にはもっと進んだことをやるとか、あるいはちょっと詰まってしまう子にはもうちょっとサポートするとか、そういうふうに学校の先生のあり様というのが変わらないと、学校自体の改革は難しいのではないかと思うのですが、これはかなり難しい。なぜかという、制度仕組みを作るだけではなくて、学校の先生方が本当にそう思ってもらえるのか、あるいは私が勝手にこう言っているだけなので、本当にそういうことが望ましいのかという、かなり厳しい議論をしないと、今、私が言っているようなことは到底実現しないと思いますが、ただ、それぐらい踏み込んだことを考えていかないと、もうとても世界の学びの変革からは取り残されてしまうのではないかという問題意識を持っています。

それから、特色ある学校をつくるということだけではないという話が、冒頭の方で出ていましたけれども、私も途中で高校を退学して別の高校に入った人間ですので、受験して、ちょっとこの学校を間違えちゃったという子供は、もしかしたら潜在的にはいっぱいいるのではないかと思いますし、先ほどお話があったように、個性を高める、学校の独自性を高めれば高めるほど、進

路選択の見直しというものをできるだけ柔軟にしておいてあげることが私も重要だというふうに思います。

それから堀井さんがおっしゃっていただいたように、まさに英語、外国語、STEAM教育、テクノロジー、コンピューターサイエンス、全く私もそうだなと思っています。何のための学校かということがあって、もちろん子供たちにとっての学びの場でありますけれども、子供たちがこれからの社会にどういう能力を身につけて出ていけばいいのかということが、そもそも高校のあり方とか特色ある高校をどうするかということでは前提としてしっかりしたものがなければいけないのではないかというふうに思います。そういう意味では先ほど野村さんから基礎学力という話もありました。教育の目標、要は長野県の県立高校を出た子供にはこういう能力を身につけることをしっかり保障します、県としてコミットします、あるいは教育委員会としてこう思っております、ということを確認していくということが重要ではないかなというふうに思います。それが例えば外国語教育は他の県には絶対負けませんとか、あるいはコンピューターサイエンス、テクノロジーのところは他の県に絶対負けませんといったようなことを、対外的にも、子供たちにも当然ですけれども、しっかりコミットメントをして、それを発信していくということが必要だというふうに私も思います。

ちなみに先ほどの県境の学校の話で、さっきから皆さんに見られながらインターネットの検索をしていて、ちょっと授業中さぼっている子供みたいで申し訳なかったですけれども、何をしていたかという、先ほどの北杜市の甲陵高校のホームページと本県の諏訪清陵高校のホームページを見ていました。前回もお話があったように、その学校の特色の発信が大事だねという話があって、なかなかコメントしづらいですけれども、皆さんにご覧いただくとすごくよくわかると思います。甲陵高校のホームページ、いま読み上げると、「甲信地域屈指の合格実績」ということで、まず「卒業生118名中70名が国公立大学に入っています」というところから始まって、「合格実績にはわけがあります」、「教員の親身な指導」、それから「30人少人数制のホームルーム」「大学入試に適したカリキュラム」、この内容の是非はともかく、すごく読み手目線で、わかりやすく自分たちの学校の特色を伝えているなとすごく感じています。こういうことも我々はしっかり学びながら、要は形式的に発信するということだけではなくて、我々は何にコミットするのかと。先ほどお話があった大学の進学の話も、何となくあまり踏み込んだ議論がいつもされないなというふうに思っているのですけれども、石坂さんがおっしゃっていただいたように受験で合格実績を上げるというの、ある意味、特色ですし、かなり多くの人たちがそこを本当は見ていると思っています。産業界の人たちも見えていますし、県外から長野県に移住しようかなと思っている人たちも見えています。これに対して単に受験勉強の競争には参画しないで違う道を行くのか、あるいはそういう学校も作るのか、あるいは県全体でそういうことをしっかりやっていくのか、こうしたことも意思決定していかないと、何となく議論が曖昧なまま進んでしまうといけないなというふうに思っています。これは教育委員会の権限ですので、教育長からも後でコメントしてもらえればありがたいと思いますけれども、やはり教育の目標というのは、とかく抽象的な綺麗な言葉で語られることが多いというふうに思っています。これは理念をみんなで共有する

上では必要なことだというふうに思いますが、しかしながら教育をどう変えていくかというときに綺麗な言葉だけで語っていては、多分本当の意味での次の世代にふさわしい教育は実現できないと思いますので、教育の目標を、もっと具体的な、そしてわかりやすい言葉で我々が語れるように、そして実際に何にコミットメントするのかということをもっとはっきり示していくということが必要ではないかというふうに思っています。ですから、ちょっと止まらなくなっちゃいましたが、あともうちょっといいですかね。

【村松座長】

端的にお願いいたします。

【阿部知事】

すみません。鳥谷越さんがおっしゃっていただいた教員の人事の問題、任地勤務手当の話、処遇の問題として、しっかり県としても考えなければいけないと思っていますが、その一方で昨日も同じような話が義務教育の先生方と話したときも出ていました。私はかなり疑問を持っているのは、そうした県境の学校や中山間僻地にある学校に、どうして若い先生や講師ばかり集まってしまうのか。学校の先生方がなかなか行きたがらない、処遇の問題があつて行きたがらないというのは分からなくはないですけども、しかしながら公務員ですから人事で動いているはずですので、そこは教員の人事のあり方という側面からもしっかり考えていかなければいけないのではないかというふうに思っています。論点がいろいろありますし、もう一点だけ、最後に、いっぱい言いたいことはありますけれど、安原さんがおっしゃっていただいた塾との連携とか、あるいは岩本さんがおっしゃっていただいた地域との連携というのは、これはまさに長野県は対話と共創ということで掲げています。学校教育の分野も決して例外であつてはいけないというふうに思っています。学校の先生方にもぜひいろんな皆さんと接してもらいたいと思いますし、子供たちにもいろんな人たち、いろんな大人と接する機会を作っていくということが重要だというふうに思うのと同時に、学校だけで全てを解決できる時代ではもう既がないということは、多くの人たちが共通している問題意識だと思います。そういう意味では、今回の高校再編においては、地域の皆さん、非常に地域の学校に対しての熱い思い、愛情を持っていただいていますので、まさにこういうときに地域の皆さんともっと胸襟を開いて、しっかり対応して、どういう部分を地域の皆さんに協力してもらうのか、どうやって開かれた学校を作るのかということを徹底的に考えていくということが重要ではないかというふうに思っています。

止まらないんで、ちょっと終わりますけれども、夏休みも子供たちの大きな体験の機会だと思いますので、私は夏休みをもっと延ばすことが必要ではないかというふうに思っています。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

夏休みの提言については、だいぶ賛同を得られたようで、ありがとうございます。

また今、知事からいただきましたその複数校で学びの場を作っていくというのは、要は今までの学校のあり方にとらわれずに考えていったらどうかということ、それから、先生の役割が変わってきているのではないかと。私も教員養成を預かる立場としまして非常に感じるところであります。

もうひとつですね、どのような能力を身につけているのか。これあの大学ですと今、ディプロマポリシーということでかなり明確に出すようなというのがだんだん欧米型にはなっているんですね。ただ、今言われたこの進学率とか、こういう具体的なものでドンと出したときに、そのメリットもあれば、弊害みたいなのが出てくるので、そこはちょっと慎重に議論しないといけないかなというのは思います。ただ長野県の高校生とかがどういう能力を身に付けるべきだろうかという、こういう根本的な議論は私も重要だというふうには考えております。

それから人事関係ですね。これもなかなか悩ましいところではありますが、実際に動かしていく上では、この人事の問題、人事配置等をどのように考えるのかというのは、これがいかなければ実際に絵に描いた餅になってしまうわけですので、非常に難しい、大事な論点かと思えます。

最後の方で言われました先生自身がいろんな多様なですね、その人たちと協働して社会と接しながらやっていくと本当に、先ほどもご提案もいただいておりますけれども、一つ大事なこれも点かなというのは感じました。ありがとうございました。

今の関係したところそれからその他の論点でも構いませんがいかがでしょうか。

鳥谷越様お願いします。

【鳥谷越構成員】

現場の教員として少しご意見をさせていただきたいと思えます。

まずこうやってYouTube等々で様々な良い動画が流れていて、本当にオンラインの授業、あるいは今、先生と生徒たちタブレット使っていますので、個別最適型の授業ということで先生たちもいろいろ勉強しながらやっているんですけども、前も申し上げたか、やはり先生たちの自尊心といいますか、やりたくて教員になったけれども時代の変化で、こういうものがどんどん進んでいる中で、果たして自分の存在意義は何なんだろうかということで悩む先生たちが増えているのも事実だということを、ぜひご承知いただきたいと思えます。

先生たちは本当に生徒と向き合って一生懸命教えていただいています。そして本当に時間を削って、命を懸けて生徒と一生懸命やっていただいている中で、やっぱり自分がもう教えなくてもネット上に素晴らしいものがある、そういった中でどう折り合いをつけて自分が授業をしていくのだ、自分は果たして要るのだろうか、そういう現状が今あるということもあの事実であります。教員のウェルビーイングはどうなっていくのかということも、非常に難しいちょうど狭間のところかなとも思っています。

もう一点、進学率ということでとかく学校の実績、あるいは人気度合いというものが測られるものもありますし、私達もどうしても東大の合格率あるいは私立で言ったら早慶、そして国公立

の割合がどうだということでは測られていますけれども、それぞれの学校がいろいろ頑張っていて、生徒たちもやっぱり早い段階から自分の精神状態とか能力とかを見極めて、指定校推薦で選んでいくとか、それこそ生徒たちの自分のウェルビーイングのためにこの学校に行きたいというのもやっぱりあるわけです。その中でやっぱり地域、卒業生からもですね、例えばこんな話も聞きましたけれども、どうして自分の母校は東大にこんなに入っていないのかとか、なぜ国公立に入っていないのかとか、そういうようなご意見も頂戴するところですがけれども、生徒自身は自分たちとしっかり向き合って、行きたい学校に行く、行かせてあげるといふ夢の実現のために私達は応援したいところなのです。それがやっぱりその東大の合格率であるとか国公立の合格率で測られているという事実と向き合わなければいけない学校の事情、そしてそれが人気の度合いに反映してくるというものからどうやってここから折り合いをつけていくかって考えると、私は長野県の進める個人と社会のウェルビーイング、子どもたちが本当に行きたいという学校を応援してあげたいなと昨今思うところがあります。

先ほど上田高校の生徒さんたちと話をすることで、これだけ対話的な授業をやりようということで先生たちも一生懸命授業にワークショップを取り入れてやっていますけれども、自分はやっぱり講義型の授業の方が合っている、あるいは対話的な授業の方が合っている。やっぱり生徒たちも両方なのですね。なので生徒さんからのご意見からすると講義型の授業を選択できる、あるいは対話的な学習を選択できる、そんな選び方ができると嬉しいですっていう意見もありました。それもすごく面白いなと思って、生徒たちの考え、私も何かいいところを取り入れていければいいなと思っているところです。一律に今こうやって進めていこうとする方向が、やっぱり生徒たちの希望と本当に彼女や彼らが自分たちの夢の実現のために向かうところと乖離しないように、私達はしっかり見守ってサポートしていきたいなと思ったところがあります以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。

前段でありました、先生自身も非常に悩まれていると、この変化の中でおそらく先ほどの話や役割自体が少しずつ変わってきている中で、先生方がどのようにこれからそういう状況と折り合いをつけながらやっていくのか、これは研修とかそういうことも含めて非常に大きな課題かなというのは思いました。

【阿部知事】

ちょっといいですか。

【村松座長】

はい。どうぞ。

【阿部知事】

鳥谷越さん、私の発言に対してのコメントという理解でいいですかね、今のは。
非常に重要なご発言だと思ひまして。

【鳥谷越構成員】

現場の肌感覚として知っていただきたいということで発言させていただきました。

【阿部知事】

昨日も義務教育の先生方にもお話しましたが、学校の先生方の働き方をもっと良くしていきたい、学校の先生方が理想とする学校を作っていくたいというのは、高校も全く同じだと思ひています。今のご発言は、現場の意見として非常に重要だと思ひあえてもう1回コメントさせていただくんですけども、先生方がもし本当にそういうことを悩まれているということであれば、やはり正面から先生のあり方とか学校のあり方を変えていかないといけない。先生方は本当に一生懸命やっただいていてと思ひますけれども、それは個人の問題として解決できるのかというと、多分それは難しいんだらうと思ひます。

鳥谷越さんがおっしゃっていただいたような、私達の存在意義はどうなっていくんだらうかということに対して、しっかりとした方向づけをしていくということが必要ではないかと思ひますし、進学の話は、先ほど申し上げたように、進学率、外形的な進学率を上げていくのがいいのかどうか、県民の皆さんや学校の関係者も含めてちゃんと議論をしていくべきだと思ひます。

ただ、逆に今のお話伺うとやっぱり進学率意識されてるんですよ、学校の先生方は。そうであれば、それに即した形の学びの機会をしっかりと提供していくということにもっと教育行政全般が力を入れていかないと、各先生方と各学校だけの努力ということだけでもいけない部分もあると思ひます。

そういう意味で、私がもっとちゃんと現場の声を聞けという趣旨でおっしゃったような感じですけど、一応両方両面、二つのご意見とも、実は学校現場の切実な状況として、まさにそういうところをしっかりと考えていかなきゃいけないんじゃないかと改めて思ったところです。私は本当に長野県から教育を変えたいと思ひていますが、私が理想とする教育を押し付けるつもりは全くありません。学校現場の皆さんの声を形にする、私の役割はそのようなものだと思ひていますので、今のような意見を先生方がどんどん率直に出せるような環境を作っていくということがまずは必要なんじゃないかと思ひています。よろしくお願ひします。

【村松座長】

ありがとうございます。

今のように現場の率直な声を上げていただきましたが、これも非常に重要だということでございます。

【野村構成員】

就学率の話が結構挙がっていて、進学というと東大の進学率という話が当然出てくると思うんですけども、もっと外に目を向けてもいいんじゃないかなと思っています。近年話題になっている、地方から、例えばスタンフォードとかバークレーとかアメリカのトップ校に進学するような事例も出てきています。日本の中だけで競争していないで世界に目を向けて、全部の高校がそのようなことをするのは当然不可能だと思うんですけども、特色の一つとして、そういうトップ校に進学できるような学校が一つ長野にあってもいいんじゃないかと思いました。

【村松座長】

ありがとうございました。

進学の問題は、おそらくいろいろな議論が出てくるかと思えますし、様々な学校があるので、野村さんのお話のように、一律に何かをするというわけには当然いかないだろうと思えます。

【安原構成員】

地域との結びつきで、少子化から始まったこの議論ですが、実は高齢化の問題が抜け落ちていると思えます。高校再編は若者が対象といますが、高齢化に対して何か還元できる成果を考えない限りは、骨抜きに終わるんじゃないかと思っています。今ここにいる我々も高齢者になる頃に、相当の高齢者がいる中での高校再編。高齢者をどう利用するかも含めて、次回でも結構ですので、考えていければいいんじゃないかと思えます。

【岩本構成員】

知事が言われていた、長野県は何にコミットするのかという話で、進学の話とか受験の話とかあったと思うんですが、ここまでの議論で、私がもしコミットするならこういうことではないかというところを二つ申し上げます。

資料にもありましたが、どの学科からでも生徒が希望する進路を叶えられるというものがありますが、例えば高校生の希望進路実現率日本一だと、長野県立高校に来たら本当に一人ひとりの希望する進路を実現できるような、国公立とか海外大学とか希望する子たちは、それはそれでちゃんといけるし、そうじゃない子たちもそうだしというような、そういう置き方だとか、もしくは長野県の教育の理念から考えたら、高校生のウェルビーイング日本一なんだと、長野県立高校に来たら、生徒たちが、本当に生き生きとしてウェルビーイングの満足度が高く、それは絶対に他県に負けない、なぜなら長野県は、みたいな形で。難関大学日本一と言うと昭和かみたいな、20世紀かみたいな感じですが、もうちょっと長野県らしいもの、未来向きなコミットメントの旗を掲げるというような話があると思えます。

もう一つは、私は知事の言われたことには基本的にすごく賛成しており、一学校主義をこえていくことです。一つひとつの学校ごとになんとかしろという考え方、例えばモデル校のようにして、その学校が大変だからお金と人を付けてそこで何とかしろというような発想は、20世紀で

はいいと思うんですけど、一つの学校だけじゃなくてネットワーク型で発想していくということはこれからの時代とても重要で絶対欠かせない観点でだと思えます。

上田高校のように教員もたくさんいる高校で、今のやり方でできるところではその必要性、必然性を感じないですから、それが切実に必要なのは小規模校だとか県境校だとか中山間地域校であり、まず必要な高校でやるということです。例えば県境校とか小規模校で、小規模校ネットワークスクール構想のようなものを長野県でしっかり作り、まずはそこでやる、次のモデルをまずここで作るという形でやってみる。そこではオンラインも使うかもしれない、個別最適な学びもするかもしれないということをしっかりとそこで見せていく。

そのときに、知事が言われたように教員の役割やあり方というのは、時代の波を見ると、これから大きく確実に変わっていくだろうと思えます。教員の役割というのが、おそらく、ティーチングのスタイルからは変わっていくだろうと。今の教員のやり方がすぐ変わるかというと、上田高校ではあと何年かはこのやり方だと思えますし、なかなか変わっていかないと思えます。小規模高校みたいな高校だと、生徒の学力も多様なので一斉指導型のティーチングを教員の役割だと置いたら多分そのやり方は変わるだろうと思えます。教員の役割は、オンラインなども含めればやるだけ、一斉授業している時間が大半じゃなく、子供に徹底的に寄り添うという、もうちょっと一人ひとりの学力だとか、興味だとかをちゃんとみて対話をしていく、もっともっと生徒にむき合うのが役割に変わっていくということで、教育の役割がなくなっていくというのは真逆です。ティーチング型の役割が教員だと思っている時代は、少しずつ確実に薄れていくけども、今後必要なのはもっと寄り添ってその子に必要な学びの教材を提供していくとか、自分で自立して学ぶ学習者はまだなれていないから、そのモチベーションを高めていくとか学び方を指導していくということをもっと一人ひとりに向かってやっていくという役割にこれから変わっていく。今までずっと議論されている話ですが、大規模校ではそれもすぐには変わらないから、まずは小規模校のネットワーク作りのようなところで実践しながら、必要とされている教員のあり方にだんだんだんだん近づき、周辺から大規模なところまで30年ぐらいかけて、おそらく変わっていくのがいいのではないかと思いました。以上です。

【村松座長】

はい、ありがとうございました。これからのネットワークスクールですかね。東ねての構想のモデルは、一つご提案かと思いました。

時間がなくなってまいりました。最後のまとめに行きたいと思えます。

今回の特色魅力化ということでとりわけ県境校中心に、国際的な話とか地域連携そういったこと、それから全国展開そういったことも含めましていろいろお話をいただきました。とりわけ1個1個の学校に特色を持たせどうやって魅力を高めるのかと。長野県内のそのものの魅力、自然の話とかいろんなものがありました、そしてこのウェルビーイングですね高校生のウェルビーイングの話もありましたけども、その目指すべき姿こういうものをより明確にしたらどうかとそ

のためにも県境校では地域連携が非常に重要で、そのためにいろんな資源を活用する政策との連携等もいただきました。

そういう中で学校をより広げていく複数の学校みたいな話も出てきましたけども、その中で今お話いただきたい先生方の役割が変わっていくんじゃないか。けども現在、学校現場の方ではそういった変化に対しての戸惑いもあるそういったものへの対応も必要だということ、また当然それを支えるための人の問題でコーディネーターのような人がいる、それから教員の人事配置それも非常に重要なところであるというようなお話をいただきました。

またこういった多様な学びの一方で、学ぶ力を伸ばすためのこの基礎的な学力の重要性、こういうのもご指摘いただいたかと思います。

そしてまた最後に、オンラインの活用であったりとか、その外との交流こういうものからどんこの県境校であってもハンディなくいろんな学びが学べるようなそういった教育が構築できないかという、今日概観するとこのようなお話だったかと思います。

全部は拾い切れませんでしたけれども、いろんな意見いただきました。また事務局におまとめいただきまして、次の第4回の会議に繋げていければと思います。

阿部知事取れますでしょうか。最後大変手短で恐縮でございますが、一言いただければと思います。

【阿部知事】

今日は皆さん熱心なご議論、ご意見ありがとうございました。村松座長も進行ありがとうございました。

私の方は予算査定があって上田高校へは伺えませんでしたけれども、ずっと聞かせていただいている私も次に向けて大変参考になりました。

一点だけ安原さんがおっしゃっていただいた自然学習と農業を一緒にしたらっていう、信州やま保育を作ったときの考え方っていうのは東京では逆立ちしてもできないことをやろうということとでやりました。

長野県の地域性強みっていうのをどう生かしていくかっていうことは、これからの特色ある学校作りにおいては重要だというふうに思いますし、もう一つやっぱりこの場合は学校の先生非常に少ないんですが、昨日も義務教育の先生方20数名の方たちと対応させてもらって義務教育のあり方を考えてます。高校のあり方もぜひ高校の先生の現場の実態の意見を踏まえてですね、しっかり私も教育委員会とともに考えていきたいというふうに思っています。

変革するときにはいろんな課題や障害が出てくると思いますし、なかなか変えようと思っても変えにくいところもたくさんあると思いますけれども、一番はやっぱりこれから未来に向けてどう子どもたちにとってどういう高校であるべきなのかと、そして今の時代背景の中で何が長野県としてより望ましい選択肢なのかを、こうしたことを常に意識しながらですね皆さんとともにさらに検討していきたいと思いますので、よろしく願います。本日はありがとうございました。

【村松座長】

阿部知事ありがとうございました。以上をもちまして本日の会議事項は終了となります。事務局の方に進行をお返ししたいと思います。よろしくお願いいたします。

【事務局：今井高校改革推進役】

本日も熱心で活発なご議論いただきまして本当にありがとうございました。事務局より2点ご連絡を申し上げます。

1点目、今後の日程でございますけれども、次回懇談会は令和6年1月12日を予定しておりますのでよろしくお願いいたします。2点目、冒頭でも申し上げましたが、本日の議事録につきましては、県のホームページに公表する予定でございます。皆様には事前に掲載内容のご確認をお願いいたしますので、そちらの方もよろしくお願いいたします。大変長時間にわたってありがとうございました。以上をもちまして、本日の懇談会を終了いたします。ありがとうございました。